

## 脳死を考える

多治見市立小泉中学校 3年 谷口 眞梨乃

「まりちゃん、それ外して！それしてると心臓取られちゃうよ」  
そう母に言われたのは、今から6年前の愛知万博の時でした。

万博会場で、黄色いカードと一緒にキラキラしたかわいいブレスレットが配られていました。それをもらった私はうれしくてすぐ手首につけたのを覚えています。しかし母に止められたので、しぶしぶ外し黄色いカードと一緒にカバンの中にしまいました。その黄色いカードは「臓器提供意思表示カード」でした。はっきりとした記憶はありませんが、その時、その意味について親に尋ねた記憶はありませんし、親から説明を受けた記憶もありません。ただ、母の発した奇妙な言葉だけが心に残っています。当時は、移植問題について全く知識がない私でしたが、あれから6年臓器移植法も改正され、移植に関するニュースをよく耳にするようになりました。2年前小さな男の子が移植を求めて渡米したが、ドナーを待つ間に亡くなってしまったというドキュメンタリー番組を兄と一緒に見ました。その日を境に、兄とは移植問題、脳死問題についてよく話をするようになりました。私は臓器移植に賛成です。もし私が脳死状態になったら、心臓も肝臓もじん臓も、それをもらったら生きていける人にあげたいと思います。それはどれだけ人の役に立つ事か。今年私は15歳になり、ドナーカードに記入できる年齢になりました。最近になって、あの時の黄色いカードが自分の机の中にしまっていることを思い出したので、早速見つけ出し、母に見せました。それを見た母は、とても驚いた様子で、

「なんであんたがこんなの持ってるの？」

と聞いてきました。

「ほら、万博でもらったあれやん、お母さんが心臓取られちゃうって言ったやつだよ」

そう言うと、母は失言でもしたかのように申し訳なさそうな顔をしていました。その時、自分の「臓器提供してもいい」という意思も伝えました。そしたら母は、

「だめだめだめ！それはだめ！もし私が脳死状態になったら、私は臓器提供してもいいけど、まりちゃんのはだめ…脳死は人の死って言うけど、心臓は動いているのよ、体だって温かいのよ、まだ息をしている子どもの心臓をどうして取り出せるわけ？臓器提供じゃなくても人の役に立つ事はいっぱいあるでしょ？まりちゃんが記入しても家族の同意がなければ移植はできないんだよ」と言いました。思いもしない反対意見に私は「そんなの人権無視じゃん！」と反発しました。明日生きられるか分からない人に自分が今まで味わってきた幸せ

を分けてあげられるのなら、こんな素晴らしい事はないのに。反論したかったのですがこれ以上言ったら親不孝者になるような気がしたので私は口を閉じました。でもよく考えてみると、母が脳死になったとする。息をたてて眠っている母の心臓を人の為にと取り出すことができるだろうか…。自分のはできても母のとなると無理、できない。母がドナーカードにサインしていたとしてもそんなことは辛くてできない。さっき「人権無視」と言って投げかけた言葉が自分に返ってきました。臓器提供については、本人にその意思があれば生きていうちに家族みんなで十分な話し合いをする事が大切であると思いました。最近読んだ「犠牲」という本の中でも、臓器提供をめぐり、残された家族が悩む苦しむ様子が描かれていました。本人の意見を尊重するのも大事ですが、残される家族の気持ちも考えなくては…。最後に決断するのは、「家族」ですから。

また、脳死問題について書かれてある本の中にはこんなことも書いてありました。脳死の人から赤ちゃんが生まれたというのです。脳死を死と考えるならば、死体が赤ちゃんを産んだ事になります。また、日本でも、高知県の女性脳死患者にメスを入れたら急に心拍・血圧が上がり身体を動かしたので、押さえつけあわてて麻酔をかけたという事例があります。それって生きてるって事じゃないでしょうか？日本はそれ以来、脳死患者には必ず麻酔をかけるようになりました。

今思います…。脳死を人の死と考えてよいのでしょうか。一つの命を救うためにはかけがえのない一つの命が消えるわけです。それには移植された側も臓器提供した側も、みんなが幸せでなければなりません。私も、私の家族も幸せでいられるためには安易なドナーカード記入はいけないと思いました。私は、人のためだと思うあまり、大事なことを忘れていたような気がします。もっと勉強して、しっかりした意見を持った大人になりたいです。それまで、ドナーカードは大切にしまっておきたいです。